

# 学会だより No. 89

2009年6月1日

発行：上智大学哲学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学哲学研究室内

TEL：03-3238-3801 FAX：03-3238-4414 郵便振替：00140-8-194788

## 第70回哲学会大会のお知らせ

今夏は下記の要領で第70回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。今回はいつもと会場が異なりますので、ご注意ください。

日時：2009年7月4日（土） 13：30～17：00

会場：上智大学12号館1階102教室

## プログラム

研究発表 13：30～15：30

阿部善彦（本学博士後期課程）

マイスター・エックハルトについて ドミニコ会教育体制の観点から

中畑邦夫（神奈川工科大学非常勤講師）

矛盾の「存在」？矛盾の「現われ」？

講演 15：45～16：45

寺田俊郎（明治学院大学准教授）

公共的意思決定と哲学的対話 「応用倫理学」の本分をめぐって

懇親会 17：30～19：30

会場：上智大学11号館7階第3会議室

会費：3,000円

## 講演要旨

### 公共的意思決定と哲学的対話 「応用倫理学」の本分をめぐって

寺田 俊郎（明治学院大学准教授）

社会で現実が生じる問題に応答する哲学の分野は、「応用倫理学」あるいは「応用哲学」と呼ばれてきた。しかし、この「応用」という接頭辞がミスリーディングであることが認識されるようになってすでに久しい。社会の問題に応答する哲学が普遍的な倫理的原理を個別的な具体的事例に応用（適用）するというような単純な営みでありえないことは、応用倫理学を批判する立場（臨床哲学など）のみならず応用倫理学の内部でもすでに認められており、具体的問題に即して思考する哲学のさまざまなモデルが模索されている。それらのなかには、問題に関わる人々の間の対話を重視する立場が少なからず見られる。

その対話に哲学の専門家はどのように関わることができるのか。さしあたり「問題の指摘」、「解決の提案」、「（思想的）資源の提供」、「対話の促進」が考えられる。最初の三つはこれまで応用倫理学が行ってきたことと重なるが、最後の「対話の促進」は最近になって哲学の専門家の仕事として論じられるようになったものである。コーディネータやファシリテータになって人々の対話を促し、問題に即した思考を促す、という仕事である。思考の「助産師」を自任していたソクラテスの姿を思い起こせば、それは哲学の専門家にふさわしい仕事であるように思われる。

しかし、たんに対話を促進するだけならば、最近の「ファシリテーション」の流行を見てもわかるように、哲学の専門家である必要はないようにも思われる。また、哲学が応答を求められる問題の多くは、生命倫理や環境倫理の問題のように、最終的には公共的意思決定を通じて解決が図られる。公共的意思決定のプロセスは政治的なものであり、そこで行われるのは対話というよりディベートや交渉であって、哲学の専門家が出る幕はないようにも思われる。それでも公共的意思決定において哲学的対話が役割を果たしうるとすれば、それはどのようなものか。この問いを、実際に試みられている哲学的対話の技法をも参照しながら、考えてみたい。

## 研究発表要旨

### マイスター・エックハルトについて ドミニコ会教育体制の観点から

阿部善彦（本学博士後期課程）

マイスター・エックハルト(Meister Eckhart 1260 頃-1328 年)は、アルベルトゥス・マグヌス(Albertus Magnus 1193/1200-1280 年)、トマス・アクィナス(Thomas Aquinas 1224/1225-1274 年)とともに、13-14 世紀の中世哲学史を代表するドミニコ会の思想家である。本発表では、エッ

クハルトの思想形成と密接に関わる歴史的背景に焦点をあてながら考察を進めてゆきたい。これまでのエックハルト研究において必ずしも十分に考慮されてこなかった二つのエアフルト時代(エアフルト修道院長、サクソニア管区長として通算約 16 年)が、近年のエックハルト研究においては、エックハルトの思想形成上、重要な時期として注目されるようになってきている。特に、第一次パリ教授時代以前の、命題集講師就任を挟むエアフルト時代におけるエックハルトの初期思想形成の重要性が指摘されるようになっており、エックハルトの思想解明にあたって、いっそう長期的な思想展開が見通される必要性が生じている。そうした研究が進められるためには、様々な著作、説教の成立年代特定が不可欠な前提となるが、この点については今後のさらなる研究の余地が残されている。然るに、本発表では、そうした年代特定とは別の方途で、エックハルトの生涯において展開する歴史的諸状況(特に本発表ではドミニコ会内での教育体制と職務の観点)から彼の思想形成に対していくつかの考察を行なうことにしたい。こうしたエックハルトの歴史的状況に関する考察は、資料の制約上絶えず未確定な要素を伴うものであるが、著作年代特定とは別の仕方、今後エックハルトの思想解明において必要とされる歴史的文脈からの照射を行なうために、必要な研究であり、一定以上の寄与可能性を保持していると思われる。

\*

矛盾の「存在」？矛盾の「現われ」？

中畑邦夫（神奈川工科大学非常勤講師）

ヘーゲル論理学において、さらに広くはヘーゲル哲学のいわゆる「体系」の全体において「矛盾をどう位置付けるか」あるいは「矛盾にどのような意義を見出すか」という問題に、全てのヘーゲル研究者たちが常に取り組んできたといっても過言ではない。たとえば今年3月に東京で行われた国際シンポジウムでの講演において、エンゲルハルト氏は矛盾をめぐるヘーゲル研究者の立場を次のように三つに分類しておられる（傍点は論者による）。

「真なる矛盾が存在するのであり、それどころか弁証法はそのような想定に基づく」というのがヘーゲルの説であるとする立場。

「矛盾はたんに悟性的思惟において現われるのみであり、悟性的思惟においては矛盾が有限な思惟の客観的本性を表わしているが、これに対して理性的思惟においては矛盾は現われないのであり、弁証法そのものは矛盾を犯すことに基づくのではない」とする立場。これは思惟が悟性的思惟であるのか理性的思惟であるのかによって、矛盾は存在するとも言えるし存在しないとも言える、つまり理性的思惟においては矛盾は存在しないのであり、従って矛盾と弁証法とは無関係である、とする立場であると言えよう。

「ヘーゲルが矛盾一般の客観性を認めているとは考えず、むしろ弁証法は有限な思惟にお

いてたんに見かけ上矛盾として現われているだけのものを解消するための一つの方法であり、したがって矛盾は乗り越えられるべきものであって、弁証法には矛盾を犯すという内容は含まれない」とみなす立場。これは の立場よりさらにラディカルに、矛盾を見出す思惟そのものが誤りであるとする立場であると言えよう。

これら三つの立場の違いとは、矛盾を「存在」としてとらえるか「現象」としてとらえるかの違いである、と言えそうだ。今回の発表は、主として『大論理学』「本質論」「第一編・第二章」の議論を追うことにより、これらの立場を調停する、あるいは控えめに言えば、少なくともなぜこのような立場の違いが生じてくるのかを示すことを意図するものである。